
河野龍太郎(1947~) 唐鎌大輔(1980~) 『世界経済の死角』 幻冬舎新書 2025年

●「経済」についてのつつじ読書会の読書記録からおさらい

- カトリーン・マルサル『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か?』 河出書房新社
- 斎藤幸平『ぼくはウーバーで捻挫し、山でシカと闘い、水俣で泣いた』 KADOKAWA
- 斎藤幸平『人新世の「資本論」』 集英社新書
- 小川さやか『「その日暮らし」の人類学』 光文社新書

➡いずれも資本主義経済を批判的に考える書物だった

論点をおさらいすると、

- 資本主義経済の際限のない利潤追求が、人間の労働力を搾取し、格差を生み出し、ついには自然環境をも掠奪の対象とする。
- 女性は、経済には寄与しないものとして排除する。
- 資本主義は予測したり、操作が困難な人びとを、計画主義的、設計合理主義的な思考によって疎外し、人間のおのおのの生き方を服従させようとする。

⇒それぞれの論者から、「脱成長」や「Living for Today」、「世界を所有するかわりに、世界に居場所を見つけられるようにしよう」といった提案がなされていた。いずれも、現在の資本主義経済を分析して、その行き詰まりを乗り越えた**その先**を描き出そうとする試みだった。つまり、現在の経済の**〈外側〉**を描き出そうとしていた、といえる。

●経済の今回は、二人のエコノミストによる経済の**〈内側〉**の議論。現在の経済がどのようなになっているかということ进行分析。

〈内側〉と〈外側〉について

例えば、文学や哲学が人間の「生」や「死」、あるいは「病」の意味を問い続けてきたとする。しかし、具体的に私たちが風邪を引いたときには、医師にかかり、それがただの風邪なのか、インフルエンザなのか、あるいはコロナなのかといった、具体的な診断と治療、処方箋が必要となる。抹香くさく「生老病死」を説いても、あまり意味はない。もちろん、「生」の意味を不問にしたあげく、過剰な延命や、チューブに繋がれた「生」を前にして、果たしてこれが「生」なのかと戸惑うのも、また当然だろう。医療の**〈内側〉**において、医師は人事を尽くす。だが同時に、「生」の意味を問わなければ、本当に必要な治療は見えてこないのではないか。それは病院の**〈外側〉**にある。

➡**〈内側:経済〉**と**〈外側:経済がどうあるべきか〉**が両輪をなすような仕方で考えたい。

⇒河野さんの議論には、**〈内側〉**と**〈外側〉**があると感じた。

「経済は本来、人々を豊かにするために存在するはずですが。しかし、気がついてみれば、経済成

長が必ずしも人間の幸福につながっているわけではない、という現実があります」(p.377)

「経済的な豊かさが必ずしも国民の幸福につながらないのなら、政府は経済成長ばかりを追及するのではなく、「幸福度そのものを高めること」を目標に掲げるのも一つの選択肢だと思います」(p.372)

エコノミストが経済を相対化する視点を提示していることを興味深く読んだ。

カトリーン・マルサルは、経済人を「自分の利益になるときにしか協力しない。人からどう見られようと、経済人には関係ない。自分が勝てば、それでいい。(p.131)」「合理的で利己的で、環境から切り離された経済人(p.40)」として描き出す。極端に誇張されているとはいえ、経済はその〈内側〉の「合理性」によって、駆動されてきたのだろう。

たとえば、唐鎌さんがウクライナ戦争開戦後のドイツ経済の低迷を説明する、次の発言には、経済の〈内側〉の合理性が強く表れているように感じた。2023年4月、ショルツ政権が原子力発電所を停止したことを評して、唐鎌さんは次のように述べている。

外野から見れば、戦時中という非常事態ゆえに、原発停止は政治判断で見送られるとの声もありましたし、ドイツ国内の世論調査でもそうすべきだという声はありました。しかし、ドイツは脱原発に踏み切りました。これは政治思想の左右を超えた非合理的な決定だったと思いますが、ドイツ政治ではしばしばこういったことが起こります。

結果、今のドイツ経済は、高価で不安定な再生可能エネルギーを主体とする電源構成に切り替わっており、ドイツ産業界の競争力を著しく奪っています。(p.98)

このタイミングで脱原発すべきではなかった、という含みがあったとしても——つまり、脱原発そのものに反対しているわけではないとしても——このときのドイツの決定を、果たして「非合理的」と言い切ることができるだろうか。

むしろ、東日本大震災による原発事故が暴いたのは、半減期が10万年を超える放射性物質のリスクを制御できると信じていた、理性への不合理なまでの過信ではなかっただろうか。

つまり、ここで「合理的な判断」と呼ばれているものは、あくまで、経済の〈内側〉の論理によって下された合理性だということを証し立てているのではないか。

●「死角」とは何か

⇒河野さんがあわせもつ〈内側〉と〈外側〉の視点は、「経済がその内側の視点だけでは、自らの行き詰まりを認識できないことを示唆しているのではないか。

なぜなら、経済の〈内側〉にいるかぎり、どれほど経済の〈外側〉から見て不合理に映るものであっても、経済の内部で合理的とされてしまえば、それは合理的な判断として通用してしまうからである。

すなわち、本書のタイトル『世界経済の死角』にあるように、「死角」とは、そもそも自分自身では気づくことのできない場所を指すのだった。

●注目した論点

第1章 なぜ働けどラクにならないのか

- p.33 企業が蓄える利益剰余金(内部留保) 600兆円
- p.70 コロナ禍で企業の内部留保が正当化されてしまった。

第2章 ドランプ政権で、世界経済はどう変わる？

- p.78 ディープ・ストーリー
- p.82 グローバリゼーションは包摂的ではなく、収奪的
- p.126 バブルかどうかの結論は、事後的にしかでない

第3章 為替ににじむ国家の迷走

- p.189 インフレ税
- p.230 1990年代後半に日本でスタートしたコーポレートガバナンス改革では、「株主の短期的な利益」を優先し、他のステークホルダーを犠牲にして利益を追及していった。

前回の読書会で取り上げたポール・オースター『写字室の旅』で見えてきたのは、アメリカが紡いできた物語が、きわめて恣意的で、それゆえに、しがみつつか、あるいは開き直るしかないほど頼りない物語だった、という点だった。ポール・オースターは、『写字室の旅』や『闇の中の男』を通して、アメリカの行き詰まりを、そのままの姿で描き出していた。

根拠にされた近代が暴かれ、人々は自分にとって都合のよい——その実、泡のように脆い——物語を盲信するほかなくなる。第2章で議論されているディープ・ストーリーとは、「事実よりも『そう感じられる物語』が政治を動かしてしまっている」(p.78)状況において、人々を動員している物語のことだろう。政治家や経済人は、まさにここに付け込む。

➡斎藤幸平『ゼロからの『資本論』』によれば、資本主義とは「自動化された資本の価値増殖運動」(p.62)であり、それを止める仕組みを、その〈内側〉に持ち合わせていない。

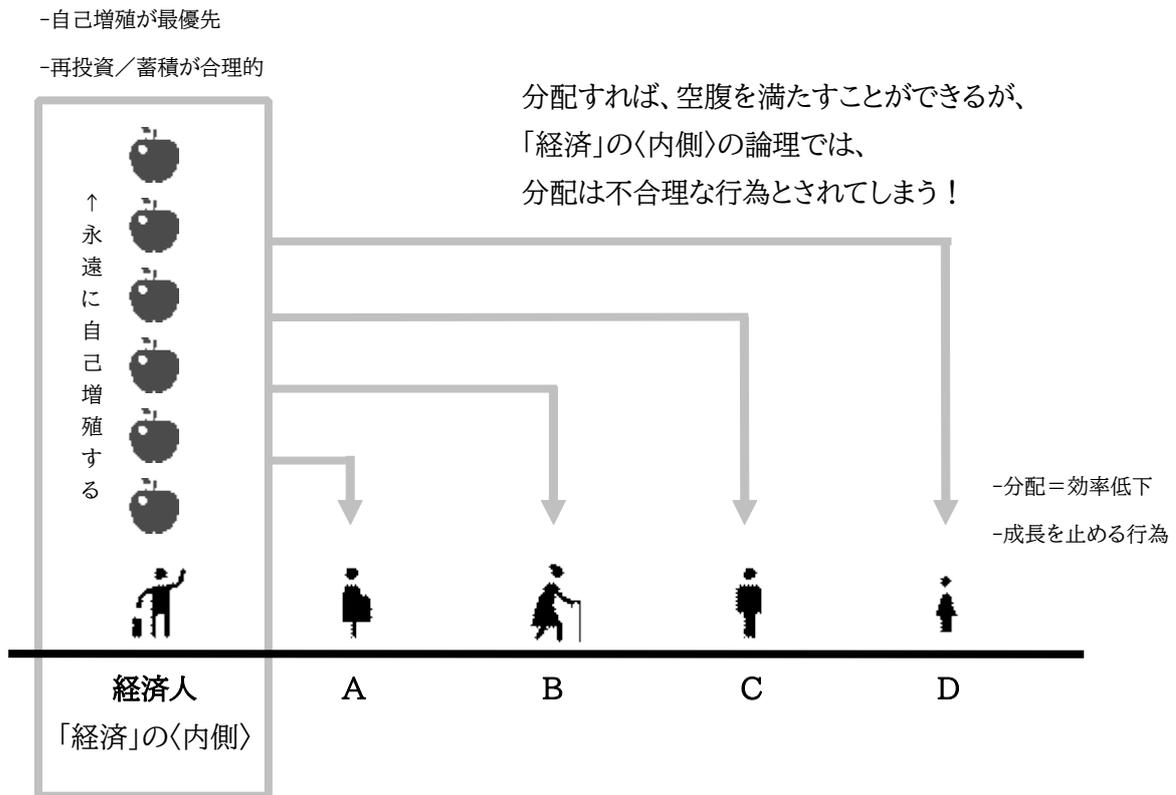
同様に、「そう感じられる物語」が政治を動かす状況もまた、その物語が自己中心的であることを内部から批判する仕組みを持っていない、と言えるのではないだろうか。

この視点から見ると、企業が内部留保を正当化できるのは、それが経済の〈内側〉において合理的な判断だからであり、株主優先のコーポレートガバナンス改革も同様である。また、グローバリゼーションが包摂的にならず、収奪的であるのは、収奪が経済活動の〈内側〉において「正しい行い」として機能してしまうからだろう。

罪の意識に苛まれることなく、すなわち収奪しているという意識なしに、収奪を続けることが可能になる。(人の良心は、収奪しているという意識をもったままでは、収奪し尽くすことができないのではないだろうか。)

いずれにしても、資本は自己増殖を止めない。止める仕組みを、その〈内側〉に持ち合わせていない。そのため現代のエコノミストたちは、この処方箋を、経済の〈内側〉ではなく、〈外側〉に求めているように読める。

【「資本主義経済」の合理性】



経済人にとって、A、B、C、D が富を持たないのは、彼ら自身に責任がある、ということになる。つまり、自己責任である。

「お金を稼げない人は、努力が足りないのだ。そういう人は成功者の言うことを聞いていればいいのだ。世の中には低賃金の働き口がたくさんあるのだから、努力しない人は黙ってそういう仕事に従事していればよろしい。誰もが能力に応じて働ける社会へ。稼げる人を優遇し、稼げない人を罰する社会へ。

サッチャーとレーガン(新自由主義)はこういう論法で、手段を問わずに経済を苦境から救おうとした。(p.176) (カトリーン・マルサル『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か?』)

おそらく、この問題の前提にあるのは、誰もが同じ公正なスタートラインに立って競争を始めているのだという想定(機会均等)や、経済人になるか、ならないかという選択が、そもそも自由に与えられていたのだという想定(選択の自由)である。

こうした、近代が自明のものとしてきた前提そのものが、弊害を生んでいるのではないだろうか。